

松 山 大 学 論 集
第30卷第5 - 1号抜刷
2018年12月発行

十 字 軍 と は 何 か
—— 中世ヨーロッパの聖戦について考える ——

山 内 進

十字軍とは何か

—— 中世ヨーロッパの聖戦について考える¹⁾ ——

山 内 進

目 次

はじめに

- 1 十字軍と現代世界
- 2 歴史的前提：イスラム世界の拡大と
中世ヨーロッパにおける教皇革命
- 3 聖地への十字軍
- 4 多様な十字軍
- 5 十字軍とは何か：記憶と認識

は じ め に

本日は、いかにもかたそうな表題にもめげず、足を運んでいただき、有難うございます。もちろん、話はかたいですし、内容も重いのですが、できるだけわかりやすくお話をして、「よく十字軍という言葉をきくけれども、このようなものだったのか」という感想をもってみなさんが帰宅できるように努めたいと思います。私自身の専門は西洋法制史で、十字軍といってもカノン法学者（中世教会法学者）や神学者などによる十字軍の正当化の法理論に関心をもっているのですが、本日は一般の方々も含めての講演ですので、そのような複雑な理論にはできるだけ触れずに、「十字軍とは何か」という一般的な問いに答えるようなお話をしたいと思っています。

1) 本稿は、2018年9月27日に開催された、松山大学法学部学術講演会における表題と同名の講演会における講演原稿を元に加筆修正したものである。

最初に結論をいっておきますと、十字軍というのは中世ヨーロッパに特有の聖戦で、近代ヨーロッパや近代世界の形成、非ヨーロッパ世界への多大な影響、さらには現代世界にもその影を落としている重大な歴史的イベントのことです。このことは改めて最後の5でお話ししますが、本日のお話の2から4は十字軍というものを知るための歴史的な説明で、本日の講演の言わば中核です。この歴史的現実を踏まえて「十字軍とは何か」を最後に考えて見ることにします。これはまた、現代の問題とも関わってきますので、最初に「1 十字軍と現代世界」という比較的なじみ深い、私たちが実際にニュースなどで体験した事柄を切り口にして、話を進めたいと思います。

1 十字軍と現代世界

まず、二つのことを紹介いたします。冷戦が終了して、自由主義世界がアメリカを中心に安定的かつ平和的に運営されるという思いが支配していた21世紀のはじめ頃に世界を驚愕させる事件が起こりました。ニューヨークの世界貿易センターに飛行機が飛び込むという米同時多発テロ(2001.9.11)です。これは、イスラム過激派アルカイダが実行したテロ事件でした。このときのアメリカ大統領はジョージ・ブッシュですが、このテロに対して断固として戦うという意思表示をした9月16日の記者会見で、思わず「この十字軍、このテロ行為に対する戦争は、時間をとることになるだろう」と口にしました。イスラム過激派に対する戦いを「十字軍」と表現したのです。実は、テロの指導者オサマ・ビンラディンは1998年に「ユダヤ教徒・十字軍に対するイスラム世界戦線」を結成して、エルサレムを占領しているイスラエルとこれを軍事的に「新十字軍」として支援しているアメリカに敵対することを明らかにし、アメリカに対する聖戦(ジハード)を呼びかけていました。もちろん、この呼びかけにまるで呼応するかのようにブッシュ大統領が自分たちを「十字軍」としてしまったのは大変な失言でした。イスラム過激派の主張をそのまま認めるようなものだったからです。

もう一つ、紹介しておきます。これはもっと新しい事件で、2015年11月13日金曜日に勃発したパリの同時多発テロです。過激派組織IS「イスラム国」がパリで起こしたもので、ISの声明はその理由としてパリが「売春と猥褻の首都、ヨーロッパにおける十字軍の旗の担い手」だからというものでした。ISが支配する地域への空爆などによる関与について、「フランスとそれと歩みをともしする者たち」が「十字軍士たちの出征を護送し続ける限り、その者たちの鼻から死の臭いが決して消えないであろう」と伝えています。

これに対して、当時のフランス大統領オランドは11月16日にヴェルサイユで両院の議員を前にして演説を行い、十字軍というレトリックには乗らず、「世界に開かれているフランス」としてISのテロリズムと戦うことを宣言しました。大統領の議会での演説はルイ・ナポレオン以来3人目でした。ヴェルサイユで演説が行われたのは、両院会議場がヴェルサイユ宮殿におかれているからで、その合同会議場では二人目の演説でした。しかし、皮肉と言えば皮肉ですが、実はそのヴェルサイユ宮殿には「十字軍の間」というのがあります。これは19世紀に、フランスの十字軍への参加を顕彰するために創られたものでした。オランド大統領が「開かれたフランス」を根拠としてISの反十字軍テロに決然と戦うことを宣言した同じヴェルサイユ宮殿のなかに、イスラム過激派が批判してやまない十字軍への参加を誇った「十字軍の間」があるというのは単なる偶然ではなく、やはり考えるべきなにかを示唆しているように思えます。このことについては、最後に改めて触れることにいたします。

2 歴史的前提：イスラム世界の拡大と中世ヨーロッパにおける 教皇革命

十字軍はなぜ起こったのでしょうか。私は、このことについて、二つの大きな歴史的前提と小さな具体的きっかけがあったからだと考えています。

① イスラム世界の拡大

二つの歴史的前提の一つはイスラム世界の誕生と拡大です。

イスラムは、メッカの商人だった預言者ムハンマド（570頃～632）が神からの啓示を受けたのがはじまりでした。ムハンマドは、迫害されて一時はメジナに逃れますが、やがてメッカを奪って、ムスリムの地としました。イスラムはしたがってアラビア半島に生まれたわけです。預言者ムハンマドはビザンツ領シリアやサーサン朝ペルシアを襲撃し、その軍勢は半島を越える力をもっていました。後継者たちはその勢いを増し、次々と支配地を増やしていきます。以下、その流れを年代順に示しておきます。

- 635年 ビザンツ領ダマスカス陥落
- 636年 シリア征服、ペルシア征服
- 638年 ビザンツの支配下にあったエルサレム征服
- 646年 ビザンツの属州エジプトの征服
- 698年 北アフリカ（カルタゴ）占領
- 718年 スペインのほぼ全域を征服
- 732年 フランク王国への侵入と撤退：トゥール・ボワティエの戦いで敗北
- 9世紀 シチリア・南イタリアの征服

この進撃の結果、スペインと北アフリカがイスラムの支配下に入り、強大だったビザンツ帝国もシリア・パレスチナ地域から追い出され、半島とギリシアに勢力を持つだけになりました。しかも、イスラムの進出はこれで終わりませんでした。ビザンツ領だったアナトリアにトルコ系遊牧民族が現れ、1071年にはイランのセルジューク朝の軍がビザンツ軍を破り、その分家はその地に新王朝、ルーム・セルジューク朝を打立てます（1077年）。これにビザンツ帝国が危機感を覚えたのは当然でした。

一方、トゥール・ポワティエの戦い（732年）によってイスラムの侵攻を撃退したヨーロッパの動きはどうでしょうか。

② 中世ヨーロッパにおける教皇革命

中世ヨーロッパといえば、ローマ教会が世界を支配していた時代というイメージが強いかと思います。ところが、中世も初期の時代はけっしてそのようなことはありませんでした。むしろ、皇帝や国王がキリスト教の最高責任者で、ローマ教皇はその下に位置づけられていました。したがって、大司教や司教などの重要な職務はしばしば皇帝や国王の親族によって担われていました。任命者は皇帝であり、国王でした。このことについて、ハーバード大学の法制史学者だったバーマンという学者はこう記しています。

「11世紀末まで司教・司祭・修道士を統制下に置いていたのは、皇帝・国王・封建領主であった。教会領は、その大部分が皇帝・国王・封建領主の手中にあり、教会領からあがる収入は皇帝・国王・封建領主のものであった。司教職なども彼らの所有物であり、彼らが近親者を司教に任命していた。……さらに教会は、皇帝・国王の支配下におかれていた。教会会議を招集して教会法を制定していたのも皇帝・国王であった。また司教をはじめ有力な聖職者は、皇帝・国王・封建領主の側近として統治に参加していた」（ハロルド・J・バーマン／宮島直機訳『法と革命Ⅰ』（中央大学出版部、2011年））。

当然、大司教や司教はしばしば戦争にも参加するし、実質的に結婚したり妾をもったりしました。これに反発しておきたのが教会改革運動で、その中心にたったのがクリュニー修道院でした。その流れを汲んで、さらに教会改革を断行し、司教などの任命権を教皇のもとにおこうとしたのがグレゴリウス7世でした。グレゴリウス7世は教会改革の貫徹を目指し、時の神聖ローマ皇帝ハイ

ンリヒ4世と死闘をくり広げました。これを聖職叙任権闘争といいます。そこで生じた大きな事件が「カノッサの屈辱」でした。「屈辱」というのは、上位にあったはずの皇帝が破門され、赦しをうけるべくカノッサで教皇に服従したからです。政治的権力が聖権をも握るというそれまでの聖俗混交の体制が崩れ、教皇と皇帝がそれぞれ聖と俗の権力を分有する体制、聖俗分離がここに始まりました。これは非常に大きな、社会全体の変革に通じていたので、バーマンによって「教皇革命」と呼ばれています。

この教皇革命はその後の教皇にも引き継がれました。なかでもグレゴリウス7世の片腕となっていたクリュニー修道院出身のウルバヌス2世はヨーロッパ中を行脚し、教皇権力の拡充をはかり、大きな成功を収めました。なかでもその最大の成果は十字軍の発案と勧説でした。

③ 十字軍の具体的きっかけ

セルジューク・トルコがビザンツ帝国の大きな脅威となっていたのはこの頃でした。これに対抗するために、ビザンツ帝国の皇帝アレクシオス1世コムネノスは、北イタリアのピアチェンツァで1095年3月に開催された教会会議のもとに使者を送りました。ローマ教皇に救援を求めるためでした。教皇は援助を約束したといえます。

ローマ教皇ウルバヌス2世がクレルモンの教会会議を開催して、その最後にすべての聴衆のまえで聖地エルサレムに向かうように勧説したのはその7、8ヶ月後の1095年11月下旬のことでした。

ウルバヌス2世がビザンツ帝国のキリスト教徒の救援に関心をもったことは確かだと思います。しかし、ウルバヌス2世は教皇革命の推進中でした。彼はむしろ、革命の動きのなかで東に関心をもったに違いありません。それは、クレルモンでの彼の演説の言葉のなかに現れている「浄化」の思想にみることができます。彼はこういっています。「不浄な異教徒たちによって占有されている、われらの救世主の神聖な墳墓、そしていまや屈辱的に取り扱われ、異教徒

たちの不潔さによって不敬に汚染されている聖地に心を向けなさい」と。

ビザンツ皇帝は、ビザンツの救援を求めました。しかし、ウルバヌス2世がしたことは、エルサレムを奪還して、キリスト教世界の回復、純化をはかることでした。ウルバヌス2世は、救援の戦士たちではなく、革命を輸出しようとしたのです。その際ウルバヌスが武器としたのは「罪の赦免」でした。終末思想のもとに最後の審判で地獄におちることを心底恐れていた当時のキリスト教徒たちは心を動かされました。ウルバヌス2世はこう訴えました。

「武器による攻撃が敵に対してなされる時には、神の全戦士よ、この一つの叫びをあげられよ。神がそれを望み給う！ 神がそれを望み給う！ と」（ロベール『エルサレム年代記』）。

人々は、「神がそれを望み給う！ 神がそれを望み給う！」と叫んだといわれています。そして、人々はほんとうに動いたのです。

3 聖地への十字軍

以下、7回または8回に及んだ十字軍について概略を簡単に紹介します。

第1回十字軍

ウルバヌス2世の呼びかけにすぐに応えて始まったのが隠者ピエールに率いられた自発的な民衆十字軍でした。とくに準備もせずにひたすらエルサレムを目指そうとしたので、行く先々でさまざまな問題を起こし、途上でもパレスチナでもその多数が殺されるか、餓えや病気で死ぬか、捕虜になって奴隷とされたといわれています。結局、その熱狂と数の割には、また民衆の自発性という点で魅力的なのですが、実際には十字軍においてあまり意味を持たなかったとされています。

これに対して、十字軍に騎士や従者を引き連れて参画し、ともにパレスチナ

で戦って成果を収めたのがフランスや南イタリアなどの諸侯たちと諸侯に率いられた十字軍でした。彼らは陸や海からコンスタンチノーブルに向かい、そこからエルサレムを目指し、エルサレムの奪取に成功します。その前後に彼らを頭目とする独自の領国も成立しました。それは、次の4つで、一般に十字軍国家と呼ばれます。

- エデッサ伯国
- アンティオキア公国
- エルサレム王国
- トリポリ伯国

この第1回十字軍は諸侯が中心になって実施されたので、諸侯十字軍と呼ばれます。なお、十字軍はしばしば世俗的利益のために行われたといわれますが、十字軍に参加することは、個々の違いはあるものの、経済的には割に合わないのが普通でした。参加者は自前で食料と武器を、したがってそのためのお金を調達しなければならず、土地を売るか質に入れて借金しました。それは、パレスチナで大きな利益を得たとしても、元がとれないほどのものでした。もちろん、パレスチナで一旗揚げようとした人々もいましたし、利益を求めて参加した人々もいましたが、実際にはパレスチナにとどまる戦士たちやキリスト教徒は少なく、十字軍国家は常に戦士や人口の不足に悩み続けました。十字軍の多くの戦士にとっては、エルサレムに到達して最大の贖罪を果たし、最後に天国へと選ばれるのがもっとも重要でした。ですから、その目的を果たしたならば、なによりも故郷に帰ることが優先されました。故郷には夫や父を頼りとする家族が待っていました。十字軍国家は設立されましたが、その維持は非常に困難でした。

第2回十字軍（1147—1149年）

このような状態のもとで、まず1144年にエデッサ伯国がイスラム側に奪還されました。ローマ教皇エウゲニウス3世はこれに対抗するために十字軍を召

集しました。このときは、ドイツ国王コンラート3世、フランス国王ルイ7世が参加するなど、国王が中心になって十字軍が構成されました。そのため大きな役割を果たしたのが聖ベルナルという修道院長で、彼の勧誘活動が大きな効果を発揮したといわれています。ルイ7世は王妃エレーノールをつれて参加しました。この十字軍はダマスカスを攻撃しますが、失敗してヨーロッパに戻ります。

イスラムの反撃が始まります。キリスト教徒の方式をみて、全イスラムの団結による聖戦（ジハード）を唱えたのがエジプトの支配者サラディン（サラフ・アッディーン）でした。サラディンはエルサレムの奪還を目指し、ハッティンの戦いでエルサレム王と騎士修道会の連合軍に大勝しました。エルサレム王は捕虜となり、エルサレムは1187年に陥落しました。エルサレムは再びイスラムの手に戻り、サラディンはイスラムの英雄となります。

第3回十字軍（1189—1192年）

エルサレム陥落の報を聞いて送られたのが第3回十字軍でした。ローマ教皇グレゴリウス8世が呼びかけたのですが、この呼びかけに応じて参加したのは、十字軍の歴史のなかでももっともきらびやかな人々でした。

神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世、イングランド国王リチャード獅子心王、フランス国王フィリップ尊厳王です。リチャード獅子心王の父はプランタジネット朝の開祖であるヘンリ2世で、実はフィリップ尊厳王の前の国王で十字軍に参加したルイ7世と別れた妻、エレーノールと結婚して、リチャードを生ませています。エレーノールはフランスのアキテーヌに広大な領地を有していたので、ここはその時点ではイングランドの支配下におかれていました。この地を後にフランスに組み込んだのはフィリップ尊厳王でした。奪われたのはやはりヘンリ2世とエレーノールの子でリチャードの弟、ジョン王でした。ジョン王は貴族層に迫られてマグナカルタを出したことでよく知られている国王です。そのようなわけですから、リチャード獅子心王とフィリップ尊厳王の仲

は悪く、しかも偉大な皇帝フリードリヒ1世はエルサレムへの途上で事故死していました。ドイツの戦士たちの多くは帰国し、フィリップ尊厳王もアッコンを奪い返した後、義務を果たしたとしてすぐに帰国しました、残ったのはリチャード獅子心王だけですが、彼は戦士としてきわめて優秀でした。イスラムの英雄サラディンと死闘を繰り返して、互いに譲らぬ戦いを続けました。しかし、そのリチャードも最終的にはエルサレムの奪還を諦め、エルサレムへのキリスト教徒の平和な巡礼をサラディンに認めさせて帰国しました。第3回十字軍は華々しい戦いもありましたが、このようにして終焉しました。

第4回十字軍（1202—1204年）

もっとも強力なローマ教皇といわれるインノケンティウス3世は、第4回十字軍を1198年8月に宣言しました。これは教皇権の権威を示す意味で行われたと思います。これを受けたのがシャンパーニュ伯やフランドル伯など第1回十字軍に参加した言わば十字軍家系でした。彼らの家系を中心に十字軍が形成されたのですが、ヴェネツィアの船を備ってエルサレムに向かおうとしたところ、資金不足のためにその支払いに窮し、ヴェネツィアの提案でハンガリー王の支配下にあったダルマティアのザラを奪うことで代金とすることにしました。しかし、十字軍はザラ滞在中にビザンツ帝国の内紛に巻き込まれます。結局は一方の側が提示した好条件に惹かれてコンスタンチノーブルに向かい、ここを占領することになりました。紆余曲折をへて、コンスタンチノーブルにラテン帝国（1204—61年）が成立し、ついにパレスチナには軍は送られませんでしたが、しかし、八塚春児『十字軍という聖戦』（NHKブックス）が指摘していますように、コンスタンチノーブルの占領そのものはヴェネツィアの要請によるものではなかったようです。

第5回十字軍（1217—1229年）

ローマ教皇インノケンティウス3世は第4回十字軍の結果に不満を覚え、新

たに十字軍を宣言（1213年）して、その実現を図りました。しかし、その後すぐに死んでしまったので、後継のホノリウス3世のもとで十字軍が派遣されます。今回はイスラム勢力の中心をエジプトと考えて、エジプトに十字軍が向かいました。一時ダミエッタを占領したのですが、結局は不首尾に終わって、軍は撤退しました。

敗北のひとつの大きな理由は、参加を誓約していたドイツ国王フリードリヒ2世がついに来なかったことでした。ローマ教皇はその参加を繰り返し求め、ついにグレゴリウス9世は皇帝となっていたフリードリヒ2世を破門します。しかし、フリードリヒ2世はそれを無視して逆に兵を進め、エジプトのスルタンと1229年に休戦協定を結び、驚くべきことにエルサレムを無血で開城させることに成功しました。エルサレムは再びキリスト教徒の支配下におかれたのです。しかし、さらに驚くべきことに、ローマ教皇は皇帝がイスラムと戦わずに協定を取り交わしたことを非難し、彼に兵を差し向けました。これ以降、長期にわたってローマ教皇と皇帝の戦いが続くことになりました。その間の1234年に、エルサレムはまたイスラム側の手に落ちます。フリードリヒ2世がエルサレムを獲得するまでのこの長い期間の十字軍を第5回十字軍と呼びます。最近、この期間の最初の十字軍を第5回とし、フリードリヒのエルサレム回復を第6回十字軍とすることが多いようです。なお、この回数数の数え方についてはとくに定説はありません。

第6（7）回十字軍（1248—1254年）

この後、十字軍の中心となったのは聖ルイとも呼ばれるフランス国王ルイ9世でした。信仰心に厚いルイ9世はエルサレムが陥落した1244年に十字軍を率いることを決め、1248年にやはりエジプトに出発しました。ダミエッタの獲得に成功しますが、カイロへの進軍で失敗し、イスラムの捕虜となりました。身代金を払って釈放され、その後4年間わずかに残されていたキリスト教徒の支配地であったアッコにとどまりましたが、1254年にフランスに戻ります。

これが第6(7)回十字軍です。

第7(8)回十字軍(1270年)

ルイ9世は1270年に再び十字軍に出発しました。目的地は北アフリカのチュニスでした。なぜチュニスに向かったかは謎とされています。しかし、ここでルイ9世は疫病に襲われ、死亡します。これで、第7回とも第8回ともいわれる十字軍は終わりました。その後、パレスチナやエジプトへの大規模な十字軍はありません。ただ、最後の拠点であったアッコンがイスラム側の攻撃で陥落するのは1291年のことでしたので、通例は十字軍が終わる年は1291年とされます。

4 多様な十字軍

しかし、このほかにも十字軍とよばれるものがあります。説明する前に、ひとつ興味深い例をあげておきます。

① 聖地以外の十字軍の一つの例：反宗教改革十字軍(アルマダの海戦1588年)

16世紀末のことです。イングランドのエリザベス1世はカトリックの元スコットランド女王メアリー・スチュアートを処刑しましたが、これに対してローマ教皇シクストゥス5世は、エリザベスの破門を更新し、スペイン国王フェリペ2世を懲罰して、信仰の敵であるイングランドを倒そうとしました。

スペインがイングランドを倒すために派遣したのがアルマダ(無敵艦隊)でした。ローマ教皇は、そのアルマダを十字軍とみなし、それに多大な援助金を与えたという説があります。事実、アルマダの兵士と船員には十字軍の贖宥状が与えられました。艦隊はその出航前に伝統的な十字軍の儀式を遂行したそうです。

② 伝統主義と複数主義

これまで見てきたのは、パレスチナやエジプトなどに派遣された十字軍でした。しかし、最近の十字軍研究はこのような理解を「伝統主義者アプローチ」と呼んで批判する傾向が強いように思えます。そのように批判する研究者たちは、十字軍は聖地だけでなく、スペインにも、バルト地方やプロイセンにも、ロシアにも、それどころかカトリック・ヨーロッパ内のフランス、イタリアの一部の地域にさえ十字軍が送られた、と主張します。その理由は、それらの軍事行動もまた、聖地への十字軍と同様の、十字軍に不可欠の要素を有しているからだ、といいます。その不可欠のものとは、伝統主義を批判するライリー＝スミス教授によれば次の四つです。

- 1 十字の印をつけること
- 2 ローマ教皇による呼びかけとそれへの応答
- 3 参加者の贖宥の享受
- 4 特権（残された家族の保護、財産や借金に対する保護）の付与

ローマ教皇またはその代理人の呼びかけによって十字の印と罪の赦免（免償・贖宥）の承認のもとに送られたのが十字軍なのです。エリザベス1世へのアルマダ艦隊への派遣の場合には1がどうだったかは不明なので、これを十字軍と言い切るのは難しいかもしれません。しかし、十字軍の要素に注目して歴史を考察するとき、このような論点に即してさまざまな歴史現象を改めて捉え直すことが可能になります。

要素に注目する形で十字軍を解釈し、その見直しを進める研究者を「修正主義者（レヴィジョンリスト）」とか「複数主義者（プルラリスト）」と呼びます。最近の研究動向は、私の感じでは「複数主義アプローチ」の方が優勢です。私も「複数主義」の立場をとります。この考え方では、「最後の十字軍」は16世紀あるいは17世紀にまでずらすことが可能になります。少なくとも、最後の十字軍同盟はトルコに対する1684年から1699年のそれでした。最後の十字軍的修道会国家は、1798年までのマルタ騎士団でした（J. Riley-Smith, The

crusades, A short history, London, 1987, p. 255.)。このように、複数主義的立場は十字軍に対する視野を大きく広げ、ヨーロッパの内的形成（キリスト教化）や外的拡大（キリスト教ヨーロッパの拡大）ひいては植民地主義・帝国主義にも連なる視点と対象領域の拡大をもたらしました。これは、複数主義の長所で、これによって十字軍研究は大きく前進しました。

③ さまざまな十字軍

それでは、そのような観点から考察される十字軍にどのようなものがあるかを次に示しておきます。

① 回復的十字軍

- i 聖地十字軍
- ii スペインへの十字軍

② 異端に対する十字軍：アルビジョワ十字軍

③ 政治的十字軍：フリードリヒ2世に対する十字軍

④ 防衛的十字軍：モンゴル十字軍

⑤ 統合的十字軍：ノブゴロド十字軍

⑥ 征服的十字軍

- i ヴェンデ十字軍
- ii デンマーク十字軍
- iii バルト十字軍（リヴォニア十字軍とエストニア十字軍）
- iv プロイセン十字軍
- v リトアニア十字軍

今日は時間もありませんので、ごく一部だけ紹介しておきたいと思います。

聖戦は一般的には神のための戦いですが、十字軍がとくに特徴的なものとして有しているのはローマ教皇という神の代理人による決定と呼びかけが不可欠だということです。これを逆にいえば、ローマ教皇が十字軍と決定するなら

ば、それは十字軍となるということです。さきほど見ましたエリザベス1世に対する十字軍はいかにも奇妙ですが、そう理解することが可能なのはローマ教皇の積極的な関与があるからです。同じように奇妙ですが、いっそう確かなのは先ほど紹介した第5(6)回十字軍の担い手であった神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世に対して行われた十字軍です。

フリードリヒ2世はアル・カーミルと平和条約を締結して、無血でエルサレムを奪い返した英傑です。しかし、すでにお伝えしたように、時のローマ教皇グレゴリウス9世は彼を破門に処して、皇帝不在の領地に兵を派遣しました。キリスト教の敵と戦わずに平和条約を結んだことを不正とみなしたからです。

別の例をあげますと、カトリックとギリシア正教に分かれたキリスト教を統一するためにドイツ騎士修道会が中心となってノブゴロド(ロシア)を攻撃した例があります。ローマ教皇は十字の印を付与していました。このときにノブゴロドを守るために騎士修道会軍と戦い、これに勝利してロシアの英雄となった人物がいます。アレクサンドル・ネフスキー公です。のちに、「戦艦ポチョムキン」で有名な映画監督のエイゼンシュテインが彼を題材とした「アレクサンドル・ネフスキー」という作品を創っています。これは、ナチス・ドイツのソ連侵攻を前にして製作された映画で、その意味は明確でした。その政治的意図はともかくとして、作品そのものは素晴らしく、ぜひ見ておきたい映画の一つです。

この映画に出てくるドイツ騎士修道会は「常備十字軍」ともいわれる騎士修道会で、もともと異教徒たちの国プロイセンを襲って、征服し、領土化していきました。聖地への十字軍と決定的に違うのは、そこにはかつても当時もキリスト教徒が住んでいなかったということです。そのきっかけを創ったのは聖ベルナルドでした。

聖ベルナルドはすでに紹介しましたように、第2回十字軍を勧説したことで有名です。しかし、彼はある意味で、エルサレム以外の地に十字軍を派遣することを理論的にも実践的にも可能としたという点で、それ以上に重要な役割をは

たしました。ベルナルは、帝国議会に集まった諸侯たちに十字軍の勧説をしたのですが、その際にドイツ北部の諸侯たちがエルサレムよりもヴェンデ人など北の異教徒に関心をもっていることを見抜き、彼らの軍勢を北へと向けることを教皇の代理として認めました。ベルナルは人類の救済を妨害するために悪魔によって産み出された「不正な異教徒の子孫」と戦うことは、エルサレムで異教徒と戦うことと同一であり、そのための戦いはまさに十字軍だ、と主張しました。彼は、帝国議会に結集した国王、司教、諸侯やキリスト教徒たちに、「かの異教徒たちを完全に根絶するか、確実に改宗させるために」「救済の印」である十字を身につけることを許しました。ベルナルはその書簡で、こう語っています。余は、「自らの権威によって、彼らにエルサレムへと出発した人々が得るのと同じ霊的な特権を彼らに約束した」。「多くの者たちが即座に十字をつけた」。余はさらに「他の者たちにも十字をつけるように説得した」と。

その戦いは改宗か死を迫るものでした。その論理は、やがてバルト地域でもプロイセンでも実行されました。ラトビアとエストニアは征服され、キリスト教化されていきました。そこにはローマ教皇によって認められた十字軍とその地にあつて武力によるキリスト教化を認められた刀剣騎士修道会が存在しました。刀剣騎士修道会はのちにドイツ騎士修道会に併合されます。そのドイツ騎士修道会は異教徒たちのプロイセンを征服しました。この一連の征服においてどのようなことが行われたかについて、当時の年代記のなかから一つだけ紹介しておきます。エストニアのロターリアを征服したときの記述で、キリスト教徒と改宗したラトビア人との合同軍による攻撃のさまを描いています。

「ロターリアに到着して、軍はすべての道路、すべての村に展開した。彼らは、村で男たち、女たち、子供たち、大きな者も小さな者もすべて発見した。いかなる噂も、キリスト教徒の軍隊の到来について警告を発していなかったからである。怒りに燃えて、兵士たちは彼らを攻撃し、男たちをみな殺しにした。……彼らは無数の人々を殺し、幾らかの女たちや子供

たちを虐殺した。彼らは、野原や村に住む者たちの命を一つも救おうとは思わなかった。街路が、そしてあらゆる地点が異教徒の血で濡れた。……全軍が三日間にわたって逃走するエストニア人たちを追跡した。エストニア人と彼らの馬がすべてなくなるまで、彼らはエストニア人たちを殺し続けた。最後に、その四日目に、彼らは全戦利品をもって一箇所に集まった。馬や多数の家畜を追い立て、女たち、子供たちや少女たちそして多くの戦利品を伴って、彼らは大いなる喜びのうちにリヴォニアへと帰還した。異教徒たちに復讐された主を讃えつつ……」(山内進『北の十字軍』講談社学術文庫)。

この殲滅戦ともいえる厳しい戦いは、聖戦においてしばしば見られるものです。異教徒を攻撃し、その土地と人々の生命、自由、財産を奪うのはキリスト教徒にとって正当な行為でした。最近の歴史研究は、このようなバルトやプロイセンでの十字軍を「新大陸」アメリカ征服のひな型と指摘しています。

④ 最後の十字軍

もちろん、複数主義的十字軍の観点からしても、十字軍は終結します。最も劇的なのは、ドイツ騎士修道会の「タンネンベルクの戦い」での敗北でした。この戦いで十字軍の最強の担い手が壊滅し、ローマ教皇が主導する十字軍の意味でのヨーロッパの外への拡大は終わります。それでも、異教徒との戦いにおいてローマ教皇が贖宥状を出して戦いを正当化することはオスマン・トルコやイスラム教徒との戦いにおいて行われ続けました。代表的なのはローマ教皇とスペイン国王などのキリスト教連合軍とトルコ海軍との戦いであるレバントの海戦(1571年)と十字軍を率いようとしたポルトガル国王セバスチャンとイスラム教国モロッコとの戦いです。セバスチャンはモロッコに進撃し、アルカサル(アルカセル・キビール)で待ち受けていたモロッコ軍と戦い、戦死しました。複数主義の立場にたっても、イスラム教徒の支配地に攻撃を加

えたアルカサールの戦い（1578年）をもって十字軍は終結する、と見ることはおおむね妥当であると私は思います。

5 十字軍とは何か：記憶と認識

本日の講演の最初で、私は、ヴェルサイユ宮殿の十字軍の間について触れました。これは、王政復古によってフランス国王となったルイ・フィリップが自身の祖先の偉業を示すことによって、その正当性を示すことが目的だったといわれています。十字軍はその格好の証明でした。聖地への十字軍の最後を飾ったサン・ルイはチュニジアで死亡しました。19世紀のフランスは北アフリカを植民地化することにまい進していました。ジョゼフ・フランソワ・ミショーの7巻本の十字軍史の1838年縮刷版の序文は「1830年のアルジェ征服とアフリカにおける最近の軍事行動は十字軍以外の何物でもない」と断定しています。エリザベス・シベリーという最近の研究者は、「アルジェリア遠征の時期にルイ・フィリップが十字軍の間のために中世の十字軍や十字軍士の絵画を注文していたのは単なる偶然ではない」と記していますが、私も同感です。

このようなことを理解するうえで必要なのは「記憶」という言葉です。たとえば、ミショーはこう述べています。「第一次十字軍の結果のもっとも明白なことはわれわれの先祖たちの榮譽である。この榮譽はまた、国民のための真の偉業である。なぜなら、十字軍の結果についての偉大な記憶が家や国民たちの存在を確立するからであり、この点において愛国主義のもっとも高貴な源となるからである」と。

過去の出来事を現在の出来事と交錯させるのは「記憶」のなせる業です。しかも、「記憶」はしばしば作り出されます。「十字軍の間」はまさにそのようなものでした。一方、イスラムの側でも「記憶」が生み出されます。オスマン・トルコが強力であった時代には、十字軍はイスラム世界では大きな意味を持たなかったといわれています。なぜなら、十字軍は結局撃退され、その後イスラムがビザンツ帝国を倒し、コンスタンチノーブルを奪って首都イスタンブール

として西洋に圧力を加え続けたからです。十字軍が植民地主義の先駆として批判されるのは19世紀末からです。これは、トルコの弱体化と結びついていました。20世紀になると、西洋に対する反撃あるいは西洋の反省の文脈のなかで十字軍が使われるようになります。エドワード・W・サイードの有名な著作『オリエンタリズム（上・下）』（板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー）はそのもっとも洗練された表現といえます。具体的な政治の場でも、たとえばエジプト独立の英雄ナセル大統領は、十字軍を撃退したサラディンになぞらえられました。記憶はこのように十字軍＝植民地主義という認識をもたらしています。

しかし、十字軍はあくまでも過去の出来事です。それは、ローマ教皇の関与を基軸とする西洋中世的聖戦です。西洋もイスラムもしばしば十字軍を記憶化することによって、それを政治化してきました。しかし、必要なのは双方が歴史を歴史とし、記憶と現実をひとまず切り離すことではないかと私は思います。「最後の十字軍」は16世紀に終わっていると私はさきほどいいました。そのような認識をもつことが十字軍を学ぶ上で大切だと私は考えています。

長い十字軍の話を駆け足でしてきました。わかりにくいところがたくさんあったのではないかと思います。それは松山のみなさんに一回で多くの話をしたいという気持ちの表れですので、ご宥恕いただければ幸いです。ご清聴感謝いたします。